



先輩の制服を



後輩の筆箱に

京都の公立中 発案

卒業生が着ていた制服の生地を原料に筆箱(ペンケース)を作り、在校生にプレゼントする。そんな取り組みがこの春、京都市の公立中学校で実現した。いらなくなる制服を有効に使い、衣類ごみを減らそうと、生徒たちが発案した。先輩の思いは、筆箱の形で引き継がれていく。

制服のリメイクに取り組んだのは、京都市中心部にある市立京都御池中学校(中京区)。同校の制服はブレザーにストラックス、スカート。これまでも卒業生に不要になった制服を募り、希望する在校生に譲ってきた。

昨年夏、当時の7年生(中学1年生)の全7クラス(約240人)で環境やごみ減量をテーマに授業をした際、制服をどう再利用するか、アイデアを寄せ合った。ブックカバーや座布団など104案が集まり、最多の19票を集めた筆箱に決まった。

技術面では、日本繊維機



卒業生の制服をリメイクした筆箱を手にする在校生たち=京都市中京区

械学会(大阪市西区)の研究グループが協力した。今回、再利用したのは、PTAの協力も得て集めた、「お下がり」にも適さないブレザーなど約70点。

「反毛」と呼ばれる綿状に戻し、織らずに作る不織布に再加工した。ベースとなる不織布は黒色だが、制服の裏地に使われていた白い繊維がところどころに見える。素材で独特な風合いになった。縫製は障害者就労支援施設「ワークハウスせいらん」(京都市西京区)の通所者に頼んだ。

完成した筆箱は、8月、研究グループのメンバーから7年生に贈られた。代表

して受け取った多葉梨緒さん(18)は「制服から思いがけないものが生まれてびっくり。大切に使います」と話した。

村田博哉校長は「身近な制服がリサイクルされるのを目の当たりにして、生徒たちはごみを減らす重要性を肌で感じられた。価値ある取り組みになった」と話す。

研究グループを統括する京都工芸繊維大の木村照夫名誉教授は、「生徒の意見も聞きながら廃棄資源を有効活用する京都モデルとして、将来は全国の学校に広めたい」と話している。

(佐藤秀男)